

学 位 論 文 要 旨

氏 名 額 尔 敦

題 目 「感覚横断的活動」を通して感性的側面から環境意識を高めるための
造形プログラムの開発に関する研究

ー中国・内モンゴル地域と日本における実践との比較を通してー

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

中国内モンゴルでは、砂漠化をはじめとする深刻な環境問題に直面しており、環境意識を高めていくことは喫緊の課題となっている。一方、内モンゴルにおける美術教育の実践は、技術指導が中心で、子どもの感性や想像力の深長を図るという視点が希薄である。そこで本研究では、感性的側面から環境意識を高めていくこと、つまり諸感覚を統合させたり関連付けたりしながら学習対象とのかかわりを強化し、環境への認識を深めていくための造形教育プログラムの開発を行うものである。

本研究ではまず第1部で、国際的な環境教育の歴史的変遷を概観したうえで、中国と日本の環境教育に関する取り組みを、『美術課程標準』（中国）及び『学習指導要領』（日本）、美術、図画工作教科書などを基に比較検討するとともに、美術教育で扱う環境教育の在り方について論述した。

第1章では、世界的な環境教育の発展過程を述べ、とりわけESD及びSDGsと環境教育との関係などの考察を行った。そして、中国における環境教育の発展と変遷、日本における環境教育の発展について、東洋的な自然観などにも触れながら論述した。

第2章では、日中の図画工作及び美術教育の中で扱われている環境教育の内容を考察した。まず、第1節で、清朝末期から現在までの中国における美術教育について、『美術課程標準』の変遷を中心に述べ、各期の特徴を明らかにした。第2節では、中国の小学校美術教科書で扱われている環境意識に関する内容を考察しながら日本の図画工作の教科書と比較し、中国の作品主義的傾向と、日本の素材体験の重視傾向などを明らかにした。第3節では、日本の美術教育と環境教育との関連性について、学習指導要領の変遷過程、図画工作科学習指導要領と環境教育の指導資料における接点などから考察した。

第二部では、感覚横断的な活動を通して感性的側面から環境意識を高めるための造形プログラムの開発とワークショップの実施、プログラムの評価などについて述べた。

第3章では「感性」についての考察を踏まえ、「感性的側面から環境意識を高めるための造形プログラム」構成の考え方や手順を示し、作成したプログラムを日本の大学生を対象としたワークショップにおいて実施し、効果の検証を行った。まず、第1節で環境問題の課題と感性の関係について述べ、感性の側面から環境問題とのかかわる意義を示した。第2節では、感覚横断的な活動の意義を示し、プログラムの内容構想の考え方や手順を示した。第3節では、プログラムの試行と考察を行った。プログラム受講者は、感覚横断的な活動を通して、自らの感覚や感性、想像力が開かれていく実感を味わうとともに、美術を通したコミュニケーションの効果や、美術を通して環境や平和などの問題に触れることの重要性を改めて感じ、図工・美術という教科の持つ今日的な可能性に気づくことができた。

第4章では、中国内モンゴル地域の大学生の環境意識や美術教育の現状などを調査し、それに基づきプログラムを修正したうえで、内モンゴル地域の大学、小学校でワークショップを実施し結果の考察を行った。まず、第1節では、内モンゴル地域の環境教育と美術教育の現状や課題を整理した。第2節では、環境意識及び美術教育の現状を把握するために、内モンゴルの小学校教員対象と大学生対象のアンケートを行った。結果、小学校教員対象アンケートでは、多くの教員が、材料の準備や道具などの外在的条件に縛られていること、鑑賞授業がほとんど行われていないこと、美術の学習において、環境問題や人間尊重などの現代的な課題を扱うことは想定されていないこと、技術・能力の育成に重点が置かれ、子どもたちの主体的な取り組みや楽しさへの顧慮は乏しいなどのことが明らかになった。続いて、大学生対象のアンケートでは、環境問題への関心や気づきはあり、他人の環境破壊行為には積極的に反対するものの、自らの行為や行動には甘く、実践化には至っていないということが示された。第3節では、プログラムの試行と考察を行った。アンケート結果をもとに、感覚横断的な活動とリサイクル活動を組み合わせた内容構成を行った。受講者にとってワークショップは、未経験の要素が多く新鮮で興味深いものとなったが、環境意識の変化という点では、十分な成果は得られなかった。しかし、感覚横断的な活動を通して、自らの感性や感覚、想像力が開かれていくことを実感するとともに、このような活動の教育的効果にも気づき始めており、内モンゴルにおける今後の展開に期待する結果となった。続いて、小学生対象のワークショップの実施と考察を行った。プログラムは日本で行ったプログラムの内容を一部分取り入れるとともに、大学生対象のワークショップで見られた、リサイクルへの意識変化に着目して、果物をブラックボックスに入れ、手で探索しながらドローイングする活動や授業で使った画用紙からエコバック作る活動などを中心に行った。結果、感覚横断的な活動という新たな授業方法は内モンゴルの子どもの美術に対する喜びを引き出し、感覚をひらき、想像力や連想力を育成するうえで効果が見られた。

第5章では、プログラムのトピックを「リサイクル工作」に絞り、日本の大学生（教員や小学生も含む）を対象にワークショップを行い考察した。リサイクル工作を起点に環境保全への意識の変容を促すことの可能性を考察するとともに、リサイクル工作の新たな意義づけを行おうとした。まず、第1節では、リサイクル工作の意義を明らかにし、第2節では、リサイクル工作の歴史的変遷を述べ、現状と課題を示した。第3節では、感性的側面から環境意識を高めるための「リサイクル工作」の定義や意義を示し、第4節では、プログラムの試行と考察を行った。検証に際しては、プレテストとポストテストの記述内容の変化をテキストマイニングを用いて分析し、受講者のリサイクル意識の変容を示すとともに、リサイクル工作の新たな価値づけを行うことができた。

第6章では、中国内モンゴルでリサイクル工作のワークショップを行い、前章で示した日本での実践と比較検討をした。まず、第1節では、中国におけるリサイクル工作の歴史や変遷及び先行研究について論じた。第2節では、リサイクル工作の学校現場における現状と課題を示した。第3節では、プログラムの試行実践を行い結果の考察を行った。リサイクル工作と環境保とを関連付けてとらえた感想が多く見られ、一定の効果を確認することができた。

第7章では、これまでの考察を基に課題を整理し、プログラム評価を主とした、今後の研究指針を立てるとともに、内モンゴル地区の小学生を対象としたプログラムモデルを示した。まず、第1節では、プログラム評価について論じ、続く第2節で内モンゴル地区の小学校5・6年生を対象とした、年間プログラムモデルを各単元の活動計画と共に示し、本論のまとめとした。